大津町の未来を考える

大津らしさを見つけるために、導き出された4つのマテリアル

大津町まちづくり推進協議会とは

〝人が主役のまちづくり〟を実践し、魅力的でにぎわいのあるまちを実感できる「町の顔づくり」を創造することで、住みよいまちづくりを目指す団体だ。会長の中村さんに話を聞いた。

大津まちづくり推進協議会
会長　中村正章さん

町全体で考えると、あまりにも広いんですね。そこで、エリア分けをして考えようということになりました。分科会をつくり、いろんな意見を出してもらおうと思ったんです。今はそれぞれの分科会でテーマを根本的なところから考えて、話し合っています。特にそのテーマのエリアの住民の立場になって考えることに気をつけています。

協議会は、とてもオープンにだれからもいつでもご意見を受け入れながら、検討を続けています。会には役場の職員も個人的に参加している人がいます。協議会の中でコンパクトな「協働」ができているんです。一人でできることは少ないですが、みんなが連携をとれば素晴らしい大津町ができてくると信じています。行政には、住民と連携したまちづくりを行ってほしいと願っています。

昔は宿場町と言われたこの町も、今では面影も少なくなっています。しかし、住んでいる人たちには「おもてなし」の心が残っています。時代とともにいろんなことが変化していきますが、気持ちや思いは変わらないんです。今の大津町も先人たちの努力で築き上げられたものです。その思いを大切にして、大津町をもっと良い町にしていきたいですね。それに協議会がお手伝いできれば言うことありません。

「上井手沿い」

副会長
水島　源廣さん
（上井手沿い分科会）

上井手は加藤清正が作り始め、細川忠利の時に完成した用水路で、熊本の地下水の元となっています。また上井手沿いは参勤道（豊後街道）として使用され、大津町は、宿場町として発展してきました。そのような歴史ある上井手もその歴史を思い起こさせる物がありません。まずは新しく昔の上井手を想像させる所が必要となります。いくら言葉や景観図で描いて見せても、イメージを固定することはできません。

大津町全体を考えれば、上井手は、静かに人々がゆったりと散策し、その歴史を知るところではないでしょうか？上井手を歴史・生活ゾーンとし、川と緑と歴史の静かな街区へと変えていきたいと思っています。

「駅前広場」

副会長
本田　純一さん
（駅前広場分科会）

私たちの分科会では、肥後大津駅周辺を中心にした安心・安全・快適なまちづくりについて議論し合っています。特に広場や南北アクセスの充実は以前からの課題です。環境的には、九州新幹線全線開通など機能の充実が図られハード、ソフトの整備が求められています。また現在の大津駅周辺のタウンウォッチングを行い、ワークショップを開催しながら具体的な課題解決に向け取り組んでいます。

駅周辺は、町の玄関です。町の主要交通機関が集積する交通の要所、大津町発展の重要な位置づけを担う大きなテーマです。駅周辺を中心としたまちの発展、交通アクセスの充実はどのようなものかを考え、将来のまちづくりに取り組みたいと思っています。

「まちづくり交流センター」

副会長
大塚　鷹之介さん
（まちづくり交流センター分科会）

まちづくり交流センター分科会では、「何のために」「その場所に」まちづくり交流センターを建設しなければならないのかということを協議してきました。住民がまちづくりの意識を連帯して持ってもらうこと、そして、中心街区機能の強化と商業地域を集積することによって新しい「町の顔」をつくるために場所を決定しました。

私たちは、この施設で出会った人たちが交流やネットワークをつくり、それが町内一円に拡がることを願っています。町内にある他の行政施設との連携を視野に入れた施設。ハコものを建設するのではなく中身・運営組織の機能のためであると考えています。ここは人と人の「和・輪づくり」をするところと考えています。

「中心市街地」

副会長
坂本　文雄さん
（中心市街地分科会）

大津町は参勤道と宿場町として歴史伝統があり、いろんな目的を持った人たちが行き来した活気のある街です。私たちは、中心街区の景観形成を考える中で実際に街中を歩いてみました。歩道としては幅員が狭く、電柱や側溝により歩行に支障があり、夜は照明灯が暗く危険性を実感しました。「歩道の整備と照明灯の整備」これが私たち分科会のテーマとして協議を進めています。街中を自由に安全に人が行き交い、肥後大津駅からまちづくり交流センターや上井手を自由に散策できる「人と人との出会いとふれあいのある賑やかな街」を想像しています。これからも皆さんのご意見や情報をいただきながら人にやさしいまちづくりの実現を目指します。

町の空には、青空が広がる きっと明日も晴れる

生まれた時から、すぐ近くにあったもの。当たり前に感じていたもの。ここに町が誇れるものが存在している。

「からいも」が大津を代表する作物になったのも、長い歴史の中での努力があり、苦労があったからだろう。そして先人の努力に感謝し、その先に進むことが大切なことはアルコール工場跡地に「子育て・健診センター」が開所したことからも分かる。

「からいも」に「人、団体」、「駅前」に「上井手」「子育て」・・・まちおこしのマテリアルはいくらでもあふれている。あとは、住民である自分たちがその素晴らしさに気づくかどうか。

この町で生きていくこと、そしてそれが快適であること。そのためには新たなるまちおこしが必要だ。

大津町にある「まちおこしのマテリアル」を愛すること。そうすれば、この町の未来はきっと青空が広がっているはずだ。

特集　まちおこしのマテリアル　終

参考資料
「大津町史」「大津甘藷の由来」
「大津からいもの歴史」
「からいもフェスティバル20回記念誌」
「からいもとアルコール工場」